「ごはんの用意もせんでええよ」と、おばあちゃんに言って、
京太と幹夫と僕は、夕めしも食わず、テレビ見ながら、母を待った。
僕は三時に食べているので、辛抱できたが、幹夫がかわいそうだった。
かなり待ったが、誰も帰って来ない。
「遅いなあ、遅いなあ」と言って待ってると、
お父ちゃんが十時前帰って来た。
「腹へった。」と言うと、
好き焼きなら男の料理や」と、
お父ちゃんは冷蔵庫から肉を出した。
お父ちゃんは僕らに珍しく、好き焼きを作ってくれた。
そこで、よろこんで、京太と幹夫と僕は食べた。
お父ちゃんは、僕らの顔ばかり見て、
ニコニコするだけで、あまり箸をつけなかった。
おばあちゃんもふとんの上に起き上がり、少し食べた。
食べ終わってすぐ、母が帰って来た。
それで、やっと、やれやれ。
お母ちゃんは、おばあちゃんの世話をし、
おばあちゃんも少しましになる。
家も僕の心もモヤモヤだった。
やれやれと、僕はそのまま部屋に戻り寝た。

98 家も僕の心の中もモヤモヤだった・・・・・・・432

Candy
in the Heart
439

萩原良昭